

1. 前回の振り返り:ドイツ新自由主義(p125-126)

- ・ フーコーがこれまで示そうとしてきたもの
18世紀に市場の問題によって提起された問題がどのようなものだったのか
正当性が問題化されないような国家の内部において、市場の自由に場を与えることがどのようにして可能であったのか
→こうした市場の自由:歴史的・法的に新しいもの
以前の自由:特権としての自由、留保された自由、一つの地位に結びついた自由など
18世紀以降の自由:自由放任としての市場の自由
→国家にとっての富裕化、拡大、支配力の原理となるという理由で成立
⇒より少ない統治で大きな国家に
- ・ 新自由主義の目標
1つの国家を存在させる
↓今回、フーコーが検討したいこと
経済的自由がどのようにして、一つの国家を基礎づけると同時に制限することができるのか
一つの国家の保証となると同時に、担保となることができるのか

2. 現代ドイツ連邦共和国を特徴づける新たな経済政策を計画した人々(p127-134)

- ・ ヴァルター・オイケン
ケインズ的方法(国家が積極的に財政介入することで市場の安定をはかる方法)に反対する立場
→当時のドイツ:ケインズ的立場を推奨していた背景
『オルド』誌に掲載した「国民経済の基礎」
国民経済とは根本的、学說的、政治的に対立するものを取り扱う
→「オルド自由主義者」と呼ばれる経済学者の学派を構成
メンバー:フランツ・ベーム、ミュラー=アルマック「経済スタイルの系譜」、ヴィルヘルム・レプケなど
→自由主義の新たな定義づけ、自由主義的統治術の新たな定義づけにおいて重要な役割を果たす
→国家の正当性と経済上の取引相手同士の自由を互いに接続させるにはどうしたらよいか、国家が経済上の取引を基礎づけること、取引が国家の担保として役立つということを認めつつ行うにはどうすればいいのかという問題をめぐって奮闘する必要がある人々だった！
⇩
- ・ フランクフルト学派
オルド自由主義者と、興味深い隣接・並行関係がある
①時代的な並行関係
②運命における並行関係
両学派はいずれも、その一部は亡命を強いられる
③同じタイプの政治的経験
④同じ出発点
いずれも、マックス・ヴェーバーを出発点としている
- ・ マックス・ヴェーバー

マルクスの問題の位置をずらせた人物

資本の矛盾した論理を定義し分析しようとした

ヴェーバー…資本の矛盾した論理よりもむしろ、資本主義社会の非合理的合理性の問題をドイツの社会学的考察、経済的考察、政治的考察のなかに導入

資本から資本主義へ、矛盾の論理から合理的なものとの非合理的なものとの分割への移行がヴェーバーの問題

↓

両学派はこの問題を捉えなおす

※2つの異なる向き、方向へ向かって。

①フランクフルト学派:経済的非合理性を解消するようなやり方で定義され形成されうるような新たな社会的合理性とはいかなるものであるかを定義する

②フライブルク学派:資本主義の社会的非合理性の解消を可能にするような経済的合理性を定義したり、再定義したり、再発見しようとする

↓結末

フランクフルト学派 VS フライブルク学派から着想を得た政府の警察

→フランクフルト学派 << フライブルク学派

・ ナチスの経験(p131-)

フライブルク学派・ナチズムは、自分たちの目標に到達するために定義し横断しなければならなかった敵対領域と呼べるようなものを定義可能にしてくれるものだった

①一つの目標を定義すること=前回分析したもの(1つの国家の正当性を経済上の取引相手の自由の空間から出発して基礎づけること)

②目標と探求が衝突するかもしれない一般的システムとはどのようなものであるかを定義すること

③自分たちの目標に到達するために自分たちが自由にできる概念的で技術的な方策をどのように配分し、再分配すればよいのかを知ること

↓どのようにして、自分たちの敵ないし敵対者としての障害物の総体を包括する論理を見出したのか?

・ ナチズムの経験

ドイツの自由主義思想…フライブルク学派とともに生まれたわけではない、批判的な雰囲気のなかで生まれていた

①国民政治と自由主義経済とのあいだの両立が有り得ないという原則

自由主義経済はあらゆる経済政策に普遍的に適用することができるような一般的定式ではなく、世界の他の国々に対し経済的には覇権主義的で政治的には帝国主義的であるような立場を獲得するためにいくつかの国が手元に持つ戦術的道具ないし戦略でしかありえない
=自由主義とは単にイギリスの政策であり、イギリス的支配の政策である

②ビスマルクの国家社会主義

ドイツ国民がその統一性のもとに存在するためには、単にそれが保護主義政策によって外部から保護されるだけでなく、内部において国民の統一性を危うくする可能性のあったすべてのものが統御され、抑制されなければならなかったということ

③戦争が始まって以来の計画経済の発達

経済に関する本質的な決定を受け持っていた行政機構のもとで中央集権的経済を組織化し、希少資源の割り当て、価格レヴェルの固定、完全雇用の確保を行おうとすること

→社会主義的統治によっても非社会主義的統治によっても継続された

④ケインズ式の統制経済

ラウテンバハのようなケインズ主義者が、経済の全般的均衡への国家の介入を提案

⇒ナチスによる権力の奪取以前から、すでに 4 つの要素(保護経済、国家社会主義、計画経済、ケインズ式介入)があった

⇒それを引き継いだのが、ドイツの新自由主義者たちだった

3. ナチズム(p135-143)

・ 経済体制

保護経済、扶助経済、計画経済、ケインズ主義経済が、固く束ねられた一つの全体を形成

↓この計画化の裏にあった目標は・・・

①ドイツの自給自足経済＝絶対的保護主義を保証すること

②扶助政策を保証すること

・ 新自由主義たちの主張

「ナチズムとは、極限的危機の状態の産物である」と語ることをやめた

⇒その代わりに・・・「ナチズム、それは一つの真理である」と語る

政治体制の本質的差異は、自由主義政策と、それ以外のあらゆる形態の経済介入政策との間にある

⇒オールド自由主義者たちが、ナチズムの経験のなかで解読したこと

・ オールド自由主義者たちがナチズムから引き出したこと

①ナチズムとは、国家権力の無際限の増大である

= 国家の消滅

国民社会主義ドイツ・・・国家は法人格としての地位を失う=人民の道具となる

求められるもの:共同体という組織における人民、共同体としての人民

②ナチズムにおいて、国家は内部からその価値をはく奪されているということ

×行政タイプの階層秩序 ○総統支配の原理・統率の原理

③政党の存在と行政機構と政党のあいだの諸関係を規則づけていた法則の総体とが、本質的権限を国家ではなく政党にもたらしていたということ

人民共同体、総統の原理、政党の存在といったものの道具にすぎないものとして国家を縮小すること

↓オールド自由主義者たちの結論

経済的組織化と国家の拡大とのあいだに、実は必然的な結びつきがある！

・ ゾンバルト

準マルクス主義から準ナチズムに至る道程において 1900 年から 1930 年に間に分析を定式化し、要約ブルジョア的かつ資本主義的な経済及び国家は、いったい何を産出したのか？

⇒資本主義は、大衆を産出する

⇒個人々人から互いの直接的で無媒介的なコミュニケーションを奪い、行政的で中央集権的な機構の媒介によってのみコミュニケーションを行わざるをえないようにした

⇒画一化、規格化の機能をもつ大量消費を課す

↓新自由主義者たちの考え

・ ナチス社会=完全な大衆社会(p140)

ナチスがやっているのは、実は、あの大衆社会、画一化し規格化するあの消費社会、記号とスペクタクルから成るあの社会を際立たせることに他ならない

例: ニュルンベルクの大衆(ヒトラーの演説に集まった人たち)、フォルクスワーゲンの理念

- ・ ナチズムを導く合理性

1つの合理性が諸々の介入をもたらし、その介入が国家の拡大をもたらし、国家の拡大が一つの行政を設置し、行政が諸々のタイプの技術的合理性に従って機能し、その技術的合理性がまさしく、二世紀前あるいは一世紀半前からの資本主義の歴史全体を通してナチズムを発生させるのだというわけです(p142, L2-5)

- ・ オルド自由主義者たちの分析から引き出せること

市場経済に関して非難されてきた不備や、市場経済に反対する根拠として伝統的に持ち出されていた破壊の効果について、実はそれらを市場経済のせいにはならず、逆に国家の責任としなければならないということ、国家および国家に固有の合理性に内在的な不備の責任としなければならないということ

→ナチズムから示されている

→市場の自由を、国家をその存在の始まりからその介入の最後の形態に至るまで組織化し規則づけるための原理として手に入れなければならない

→国家の監視下にある市場よりもむしろ市場の監視下にある国家を。

4. 現在の新自由主義(p144-149)

- ・ 問題となっていること

市場経済が、現在あらゆる場所でいろんな理由によって誰もがその欠陥を警戒しているものとしての国家に対して、実際にその原理、形式、モデルとして役立つのか否かということ

=市場は実際に国家と社会とを形式化する力を持ちうるのだろうかということ

→政治と社会に形式を与える市場経済の力がどこまで拡張されるのかを知ること

- ・ オルド自由主義者がしたこと

①交換の位置をずらしたこと

市場の原理を、交換→競争へ

18世紀の自由主義・・・市場のモデル及び原理は交換、第三者の介入は等価性の担保のために行われる

→生産への介入はあっても、市場の内部への介入はない

新自由主義者・・・市場における本質的なものは、競争のなかにある、等価性ではなく不平等が本質的

→経済的合理性を保証しうるのは競争であり、競争のみである

→競争・・・価格の形成によって経済的合理性を保証する

→競争できるように、国家は自由放任しなければならない

⇕

18世紀・19世紀の自由主義者が考えていた自由競争:市場は自然的

⇒新自由主義者・・・競争は、自然の現象では全くない!競争は本質!

諸々の不平等のあいだの形式的作用!

↓

競争は、統治術の歴史的目標であり、尊重すべき自然の所与ではない(p148, L10-11)

- ・ 経済理論

形式的メカニズムとしての競争の分析、最大効果の標定を行うのが、経済理論の役割

- ・ 競争経済と国家との関係

異なる領域を互いに境界画定しあう関係ではない

自由にしておくべき市場の作用も、国家が介入を始めることになる領域もない

⇒市場の本質そのものとしての純粹競争は、それが産出されることによって初めて、それが能動的な統治性によって産出されることによって初めて、出現可能となる

・ 市場経済

市場経済・・・統治から何かを差し引くことはなく、指数を指示し、構成して、あらゆる統治行動を規定することになる規則をその下に置かなければならない

=市場ゆえに、統治しなければならない→市場のために統治しなければならない

・ 次回確認したいこと

統治術に関して、市場とは統治のなかで産出されるべきものであるということの一般的原理によってもたらされる効果は、いったいどのようなものなのか？

5. みなさんと一緒に考えてみたいこと(濱松からの話題提供)

ナチスとは、国家が共同体の人民の道具となった究極の大衆社会であり、ナチズムを繰り返さないために市場を統治術の場所として使おうという試みから、新自由主義が生まれたということなのかと読み取ったが、そもそも、ナチズム誕生の背景にあった合理性がどのような意味での合理性なのか、いまいち読み取れなかった。皆さんと一緒に確認してみたい。